W-2　グロス再考：実践が支える言語観、言語観が導く実践*

メンバーと構成

企画：松田俊介 (東京大学大学院)　　司会：西村義樹 (東京大学)

コメンテーター：林徹 (放送大学)、古賀裕章 (慶應義塾大学)、西村義樹 (東京大学)

発表者：浅岡健志朗 (東京大学大学院)、石塚政行 (東京大学)、田中太一 (武蔵野大学ほか)、松田俊介

[1] 趣旨説明：司会者による趣旨説明

[2] 研究発表：

(i) グロス実践における問題点とその背景にある言語観 (浅岡・石塚・松田)

(ii) グロス実践における問題点の回避と素朴知識 (石塚・田中)

(iii) 表示は何を表示するか：グロス・ラベル・図 (松田・田中)

(iv) ブロックの比喩の功罪と動的言語観 (田中・浅岡・石塚・松田)

[3] コメント：コメンテーターによるコメント

[4] 全体討論：会場からの質疑応答・総括

企画趣旨

言語学の研究 (とりわけ文法研究) では例文が重要な役割を果たす。読者に馴染みのない言語の例文を挙げる際には、グロスを用いるのが一般的である。グロスは読み手の理解を助けるための道具であると同時に、書き手の言語観を如実に反映してしまう道具でもあるが、後者はあまり注目されていない。手話研究におけるラベル、理論言語学における図もまた同様である。本ワークショップでは、これまで省みられることの少なかったグロス・ラベル・図という表示そのものを集中的に検討することで、研究実践上の問題を浮き彫りにし、さらにその解決へ繋がる「動的言語観」を提示する。題材とする言語は、主にバスク語・チェコ語・日本手話である。

第 1 発表：グロス実践における問題点とその背景にある言語観

グロスを使用する際には、しばしば次の 2 つの問題が生じる。1 つめは、多義語に対してどのようにグロスを振るのかという問題である。例えば、バスク語の動詞 *ibili* には「歩く」という意味と、様態を指定しない「移動する」という意味がある。文脈上どちらの解釈も可能な場合に、グロスはどう付すべきだろうか。2 つめは、例文中の特定の要素によって表現されるのではない意味をどのように表示するかという問題である。例えば、チェコ語の過去時制においては、主語の人称を表現する助動詞の不在によって、主語が三人称であることが表現される。この場合、主語の人称に関する情報はグロスにどのように表示するべきだろうか。こうした問題の背景にあるのはブロックの比喩——言語記号 (形態素) を物体に見立て、さらに複合的な言語表現を複数の物体を組み合わせた物体に見立てること——である。この見方では、形態素が常に同一性を維持しつつ複数の環境に現れること (定常性) や、複合的な表現全体の性質がそれを構成する形態素の性質からのみ予測可能であること (合成性) が想定される (Langacker 2008)。第 1 の問題には定常性の想定が、第 2 の問題には合成性の想定が関わっている。

---

* 本ワークショップの一部は、科学研究費補助金 (20K13023，19H01264, 21J21787) の助成を受けたものである。本企画趣旨で参考にした文献の書誌情報は個別発表の予稿を参照されたい。

第 2 発表：グロス実践における問題点の回避と素朴知識

本発表では、グロスにおける略号の役割を検討することを通じて、言語知識に含まれる普遍性に迫る。まず問題になるのが、略号の表すものが個別言語に固有のカテゴリー (descriptive category) として想定されているのか、通言語的に適用可能な概念 (comparative concept) として想定されているのか不明だという点である (cf. Haspelmath 2010)。また、仮にいずれの意味で略号を使用しているのかが表明されている場合であっても、その略号を用いる基準が示されることは極めて少ない。したがって、ある要素に対して ERG と振られていたとしても、そこから分かるのは分析者が当の要素を "ergative" であると見なしているということまでであって、"ergative" をどのような基準で用いているかは分からない。多くの研究にこのような問題が潜んでいるにも関わらず、言語研究は特段の支障なく進展している。このことは、文法カテゴリーに関する前理論的な素朴知識の存在、ひいては、文法カテゴリーのスキーマやプロトタイプによる規定の有効性 (Langacker 2008) の強いサポートとなる。

第 3 発表：表示は何を表示するか——グロス・ラベル・図

本発表では、分析の範囲を広げ、グロス・ラベル・図という言語研究における「表示」一般が孕む問題を検討する。表示は読者への補助であると同時に、著者の分析の提示にもなっている。例えば、ある要素に対して ERG と振った場合、そこから著者が当の要素を "ergative" であると見なしていることが提示されるわけである。しかし、このいわば「表示が分析をも表示する」という側面はあまり省みられていない。さらに、ラベルと図にはそれぞれに固有の問題もある。日本手話研究で使用されるラベルは、意味ではなく形式もしくは語を表示するための道具立てであるとされている (松岡 2015)。

/パン　食べる/　　(松岡 2015: 58)

しかし、読者に馴染みのあるメタ言語で表示されることから、実際には意味を表す道具立てとして使用されることも多い。図の場合には、補助的な道具であるはずが、それ自体が理論的主張として捉えられることがある。その結果、「図の外形上の特徴」から「理論それ自体の不備」が読み取られ、それに基づいた批判がなされることが多い。ラベルや図に関するこれらの問題は、2 種類の認知バイアス——ストループ効果と画像優位性効果——に起因するものと考えられる。

第 4 発表：ブロックの比喩の功罪と動的言語観

グロスによる言語分析は、ブロックの比喩を前提としており、またその見方を強化するものでもある。複雑な現象の全体を一挙に捉えるのではなく、まず、それぞれの要素の働きに注目するという説明手続きには直感的な分かりやすさがある。しかしながら、グロス実践を通じてブロックの比喩を実体化させてしまうことには大きな問題がある。この問題は例えば次のようなやり取りにおいて顕在化する。

A: I would love to get <u>a cat</u>.　B: <u>A cat</u> would be OK, but cats would be a problem. (Langacker 2016b: 432)

ブロックの比喩を前提とすると、A が用いた *a cat* にも B が用いた *a cat* にも同一のグロスが振られることになり、そこから両者を同一視する傾向が生じる。しかしながら、A は猫が単数であることにはとりたてて注目しておらず、だからこそ B は猫の数を問題とする返答を行っているのである。このような同一形式における意味のずれは決して例外的なものではない。言語知識は一般にこのような動性を有していると考えられる。本発表では、ブロックの比喩から生じる問題への解決策として、言語を極めて柔軟な知識構造の集合体 (assembly) として見る「動的言語観」を提示する。